B.アンマナーティの教会堂・修道院の計画案とサン・ジョヴァンニーノ・デイ・フィオレンティーニ聖堂およびコッレージョの設計について

B. AMMANNATI'S PROJECT OF S. GIOVANNINO DEI FIORENTINI AND COLLEGIO RELATIVE TO PLANS OF CHURCHES AND RELIGIOUS HOUSES

岩谷 洋子*
Yoko IWAYA

Bartolomeo Ammannati, the architect in the 16th century, projected S. Giovannino dei fiorentini and Collegio for Jesuit Society in Florence. Ammannati's decorative and complex plans of the church were left in "Città ideale", but actually, Ammannati designed a functional and simple church as a result of granting of demands of Jesuits.

Ammannati designed a cloister which merely separated the space of community life from the space of schoolrooms in the small Collegio, but in plans of religious communities, it is obvious that Ammannati considered a connection with urban space, by closed or opened cloister.

Keywords: Florence, Mannerism, Jesuit Society, Religious architecture

フィレンツェ, マニエリスム, イエズス会, 宗教建築

1. はじめに

バルトロメオ・アンマナーティ (Bartolomeo Ammannati; 1511-92 年) は、ローマでは法王ユリウス三世 (位; 1550-55 年) のために働き、フィレンツェではメディチ家のコジモ一世やフランチェスコ一世らに仕えて活躍した彫刻家であり、建築家である¹⁾。アンマナーティは60歳を過ぎた頃に、自らの出生地であるフィレンツェにイエズス会のための聖堂およびコッレージョを設計した。イエズス会はイグナティウス・デ・ロヨラ (1422-1566 年) とその同士たちによって創立されて後、法王に対する絶対的な服従の態度を認められて、1539 年に法王パウルス三世 (位; 1534-49 年) から、修道会としての承認を受けた。それ以降イエズス会の活動は、宗教改革の後の再興や肅正などの問題に直面していた当時のカトリック世界に急速に広まりつつあった。

アンマナーティは、このような状況下にあるイエズス会に対して、フィレンツェにおけるイエズス会の活動の拠点となるべき建築の設計を、建設資金すべてを自らの負担として担当できるよう接近し、その仕事を一任されることになった²⁾。アンマナーティは生涯の前半を彫刻家・建築家として活動していたが、自らが所属していたアカデミア・デル・ディセーニョに宛てた手紙に見るように³⁾、宗教的に深く改悛した後は、専ら建築のみを自己の仕事とするように

なっていた。したがってイエズス会のための仕事は、アンマナーティにとってきわめて重要な意味を含んでいたと考えられる。

本論においてはまず、アンマナーティが、いわゆるルネサンスからバロックにいたるまでの時代の移り変わりの中で、自らの制作活動の転換を経て、建築家としてイエズス会のためにいかなる建築を設計したのかを明らかにする。

さらに、イエズス会という、積極的に世俗に対して働きかけ来訪する市民を受け入れようとする修道会の建築に関する設計と、実際上の制約を受けずにアンマナーティが自由にデザインした『チッタ・イデアレ』⁴⁾の中の聖堂や宗教的共同体施設の図面から、アンマナーティが都市における宗教的共同体施設のあり方をいかに捉えていたかを把握したい。

2. サン・ジョヴァンニーノ・デイ・フィオレンティーニ聖堂 2-1. 聖堂建設までの経緯

当時のフィレンツェ公国を治めるメディチ家のコジモ一世は、妻のエレオノーラ・ディ・トレドがイエズス会の2代目総長ライネスと親密な関係にあったことから、1551年にイエズス会士をフィレンツェに召喚した⁵⁾。イエズス会にはコジモの取り計らいにより、1551年に建設されたサン・ジョヴァンニーノ・エヴァンジェリスタ

* 東京理科大学工学部建築学科 助手・工博

Research Assoc., Dept. of Architecture, Faculty of Engineering, Science Univ. of Tokyo, Dr. Eng.

(San Giovannino Evangelista)とそれに隣接する敷地が与えられることになった(1557年)。それから200年ほどイエズス会はこの場所に留まるのであるが、法王クレメンス十四世(位; 1769-74年)の治世にイエズス会解散令が發布され(1773年)、フィレンツェにおいてもイエズス会は1775年に追放されることになった。そのあとに移った修道会の名をとって、この聖堂は現在においてもサン・ジョヴァンニーノ・デッリ・スコローピ(San Giovannino degli Scolopi)と呼ばれているのであるが、本論においてはイエズス会がこれを所有したときの呼び名にしたがい、サン・ジョヴァンニーノ・デイ・フィオレンティーニ(San Giovannino dei Fiorentini)とする。

聖堂が位置する敷地はメディチ家の館(palazzo Medici)の向かい側であり、かつメディチ家と関わりの深いサン・ロレンツォ聖堂が建つ広場に面する場所にあった。その敷地はイエズス会士が共同生活を営み聖務を行うには狭く不十分であったが、資金難のため周辺の土地を新たに購入することも困難であった⁶⁾。

このような状況にあったフィレンツェのイエズス会士とアンマナーティが何らかの関係を持つようになったのは、1572年のことである。時には他の修道院を敷地ごと買い取ることも試みられたが、結果としてはアンマナーティが初めから主張し続けたとおり、広い敷地を他の場所に探すのではなく、元ある場所から徐々に拡張していくことになった⁷⁾。こうした経緯から、建設が開始されたのは、しばらく後の1579年のことであった⁸⁾。

共同生活と勉学の間であるコッレージョの部分は、聖堂よりもいっそう切迫した問題であったため、まずは仮設のコッレージョが早急に建設されることになった。1578年から1579年にかけて敷地に隣接する建物が購入され、その敷地に1579年5月1日に第一の礎石(prima pietra)が据えられ、はやくも年内にはコッレージョに必要なものが備えられて完成に近づいていた。コッレージョとしての体裁が一応整えられた後、1581年の初頭には聖堂の拡張・建設が開始されている⁹⁾。

2-2. アンマナーティによるサン・ジョヴァンニーノの設計

アンマナーティが設計したサン・ジョヴァンニーノ・デイ・フィオレンティーニ聖堂の平面は、長方形の身廊の両脇に礼拝堂が並ぶ長堂式である(図-1)。15、16世紀のイタリアにおいては、フィレンツェやローマを中心に、理想的な数的比例に基づき、幾何学的形態を用いて集中形式の聖堂や礼拝堂が多くデザインされていた。特に、生前からすでに「神のごとき」¹⁰⁾存在であったミケランジェロも、ローマのサン・ピエトロ大聖堂の計画においては、有機的な表現を導入しながら当初のブラマンテの計画に立ち返って、集中形式を採用していたのである。そのような完全性の表現をめざす、いわゆるルネサンスの聖堂の平面形式と、このサン・ジョヴァンニーノの平面との間には、著しい差異が認められる。ミケランジェロこそ、アンマナーティがローマやフィレンツェに滞在した時期に師として多くを学んだ建築家であったが、サン・ジョヴァンニーノ聖堂の平面には、ミケランジェロが表現したような有機的な形態は採り入れられてはいない¹¹⁾。

では、アンマナーティは他の建築家が設計した聖堂から何らかの影響を受けて、このような長堂式の聖堂を設計したのであろうか。その可能性が考えられるものとして、ヴェネツィアのサン・フラン

ческо・デッラ・ヴィーニャ聖堂(San Francesco della Vigna)が挙げられる¹²⁾。なぜなら、アンマナーティはヴェネツィアに赴き、この聖堂の設計者であるサンソヴィーノ(Jacopo Sansovino; 1486-1570)のもとで働いたからである。それは時期としても、アンマナーティがパドヴァやヴィチエンツァで実際に建築家として活動し始める直前のことであった。

長堂式平面をもつサン・フランчесコ・デッラ・ヴィーニャ聖堂は、サンソヴィーノが設計した当初から、その特異な設計の理論が注目を集めていた。フランシスコ会の修道士であるフランчесコ・ジョルジにより、聖堂の平面にピュタゴラスとプラトンを融合させた数の調和の理論が具現されているかどうか検討され、その覚書に基づいて平面の設計が修正されたのである¹³⁾。さらに、このジョルジの覚書に同意しているセルリオこそ、アンマナーティに大きく影響を及ぼした建築家であった¹⁴⁾。

建築家としてのアンマナーティについては、1550年にローマを訪れるまでの活動についてはさほど重要視されなかったためか、アンマナーティがサンソヴィーノのもとで働いていたときに、サン・フランчесコ・デッラ・ヴィーニャ聖堂が設計・建設される現場に居合わせたのかどうかについては、図面などの直接的な史料が残されていないこともあって、明らかにされていない¹⁵⁾。しかし、アンマナーティの聖堂の計画を考察するにあたっては、是非とも確認しておかねばならない。

図-1 アンマナーティ; サン・ジョヴァンニーノ聖堂およびコッレージョのデザイン Archivio di Stato, Disegni e Mappe, coll. I, cart. 29, n. 97, Roma

アンマナーティと同時代のボルギーニの記述に従って考えると、アンマナーティは2回ヴェネツィアに滞在したことになる¹⁶⁾。それそれについてできるだけ正確に年代を設定するならば¹⁷⁾、まず初めの滞在は1530年頃であり、おそらくとも1531年の末にはアンマナーティはフィレンツェに戻っていた。それはサンソヴィーノがこの聖堂を設計した1534年よりも前のことである。2度目の滞在は1542年以降であるから、聖堂の設計変更が行われた後のことである。

したがって、アンマナーティはサン・フランチェスコ・デッラ・ヴィーニャ聖堂の建設の実際の仕事を通してサンソヴィーノから学ぶことはなく、また、ジョルジの理論による設計変更を直接体験することもなかったのである。後にサンソヴィーノ自身からこれについての情報を得ることは可能であったにせよ、ジョルジの覚書に従って設計が修正される過程を、サンソヴィーノの下で働きながら体験することはなかった。さらに、機能面を重要視するイエズス会のために、アンマナーティが、ジョルジの覚書にあるようなプラトン主義とキリスト教を融合するような比例に関する知識を採り入れて聖堂を設計しようとしたとは考えがたい。

ところで、アッカーマンは、宗教改革後のカトリック教会の肅正・再建の時期に建設された聖堂には、“box style (箱型式)”という共通のスタイルが認められると指摘している¹⁸⁾。そのスタイルとは、幅の広い身廊に平天井が架けられ、身廊の左右には礼拝堂、奥には内陣が設けられた形式であるという。聖堂が多くの民衆を収容するための広々とした身廊の空間と、そこから機能上区分された礼拝所の空間からなることで、聖堂内ではそれぞれの機能に従って空間が区画され配置されているという点については¹⁹⁾、アンマナーティの設計したサン・ジョヴァンニノ聖堂は、まさにアッカーマンが言うところの“box style”に相当する。アンマナーティはこの小規模な聖堂に、多くの人々が集まれる広い身廊を設け、その脇に奥行きの浅い礼拝所を並べている。アンマナーティはフィレンツェにおいてブルネッレスキから多くを学んだと考えられるが²⁰⁾、ブルネッレスキの設計によるサント・スピリト聖堂のように、入口から奥行きに向かってのパースペクティブの効果を生み出す柱を、サン・ジョヴァンニノ聖堂において並べることはしなかった。

また、アッカーマンは“box style”を、新しい時代の創造性による産物というよりも、むしろ教会の果たす新たな役割に呼応させるように、機能面での必要性から生み出された結果として解釈している²¹⁾。ところが、“box style”においては、列柱により身廊から側廊の空間が分けられていないこともあって、身廊の空間と礼拝所の空間との機能的な区分が未だ不十分であり、それらは直接的に接することになってしまう。礼拝所に奥行きが十分にあって相互に連結されているならば、身廊の大空間に集う人々の空間と個人的に礼拝所に向かう人々の空間が交わることもないのだが、そうするほどの奥行きを持たないから、教会の新たな役割に対応させようとしながらも、時には身廊に集う人々の空間と礼拝所で礼拝する個人的な空間が交錯することもあると考えられる。サン・ジョヴァンニノ聖堂においても同様なことが認められるのである。

聖堂内部の立面のデザインは、平坦な白い壁面が線状のピエトラ・セレーナで分割されて2層構成となっており、各開口部には縁取りが付されている(図-2)。1層目の身廊の両脇に並ぶ礼拝所にはそれぞれアーチが架けられ、ニッチとそれを挟む対の付柱でひと

つの単位となっている。2層目では1層目のアーチの上部に、高さの抑えられた窓が配置されている。『チッタ・イデアレ』の3383A(図-4 a)の図面は、そこに具体的に描かれた立面から見ても、アンマナーティがサン・ジョヴァンニノのデザインを考案していたときのものであると考えられる²²⁾。

天井に関しては、アンマナーティは平天井を架けようとしていたらしい。当時、平天井を架けるということは音響上、特別な意味ももっていた。1568年に建設されたローマのイル・ジェズ聖堂には、ヴィニョーラとファルネーゼ卿が石のヴォールト天井を架けようとしていたが²³⁾、これに対して3代目のイエズス会総長のフランチェスコ・ボルジア(在任期間;1565-72年)は、音響効果を考慮して平天井にすべきであると主張していたのである²⁴⁾。ボルジアは、先ほどのヴェネツィアのサン・フランチェスコ・デッラ・ヴィーニャ聖堂の設計についての覚書の中でジョルジが述べた、人の集まる大空間においては音響上、石造のヴォールト天井よりも木造の平天井が好ましい²⁵⁾、という考えを受け入れ、これを実現しようとしていたと考えられている。アンマナーティがフィレンツェのイエズス会の建築計画に関わるようになったとき、きわめて初期の段階にはあるが、イエズス会の総長を務めていたのは、このボルジアであった。平天井を架けたとされる理由としては他にも、アンマナーティのデザインの断片をもとにフォッシが推定復原したファサードの高

図-2 サン・ジョヴァンニノ聖堂、内観、フィレンツェ

図-3 サンタ・マリア・イン・グラディ聖堂、内観、アレツォ

さと、平天井の内部の高さが釣り合うということも挙げられる²⁶⁾。アンマナーティ自身も平天井を架けることに異論はなかったはずである。アンマナーティ自身が建設に要する資金をすべて負担していたのであるから、結局はアンマナーティが強く主張すれば意のままに設計することが可能であったからである²⁷⁾。

アンマナーティがアレツツォに設計したサンタ・マリア・イン・グラディ聖堂 (Santa Maria in Gradi) (図-3) にも平天井が架けられている。サンタ・マリア・イン・グラディ聖堂は、アンマナーティがサン・ジョヴァンニーノ聖堂の仕事の後に、ただ独りで設計を担当した聖堂であり、建設工事が開始されたのはアンマナーティの死後のことであるが、工事にあたっては既存部分をすべて取り壊し、アンマナーティの模型にしたがって建設されたのである²⁸⁾。したがって、この聖堂にはアンマナーティの聖堂の設計における基本構想が、いっそう明確に表現されていると考えられる。

サンタ・マリア・イン・グラディ聖堂は長堂式の平面であり、立面においては、平坦な白い壁面が灰色の線状部材によって分割されている。このような内観は、現在のサン・ジョヴァンニーノ聖堂の身廊の天井を平天井に置き換えたものときわめてよく類似している。したがって、サン・ジョヴァンニーノ聖堂は、計画に際して資金や敷地獲得の面で困難が生じたとはいえ、実際的な問題に対応させるために生み出された単なる解決案ではなく、アンマナーティがさまざまな問題に対処した上で意図した、聖堂についてのあるべき表現であると考えられる。

2-3. 『チッタ・イデアレ』における聖堂との比較

『チッタ・イデアレ』の中にみる聖堂の平面図に関しては、比較的完成度の高い図面がそろっている (n° 3382A ~ 3390A)。これらの聖堂を構想するにあたって、アンマナーティは敷地や費用、イエズス会からの要求などといった諸々の制約からは解放されていたため、自由に設計し表現することができた。

平面は、いずれも長堂式に集中式を合わせた構成とされている

(図-4 a, b, c)。聖堂では長堂の空間が手前に配置され、その奥にある集中式の空間は、中央にクーポラを戴くよう構想されている。そこでは中央のクーポラの周囲の各部に小規模なクーポラが繰り返し用いられるなど、全体と部分、部分と部分の対応関係が考慮されたものもあるが、アンマナーティはこうした比例関係に重点を置くよりも、むしろ横幅の広い長堂にいかにか柱や礼拝所を並べるか、その並べ方によってどれほどの例が案出できるかという、多様性を創り出すことに関心を抱いていたと考えられる。集中式の部分も、長堂部分の柱の並べ方に呼応するように、それぞれがデザインされている。また、長堂は列柱が配されて身廊と側廊からなる構成とされ、側廊の両脇には礼拝所となるニッチが設けられている。このような点からも、『チッタ・イデアレ』に描かれた聖堂は、いずれもサン・ジョヴァンニーノ聖堂と共通するような“box style”であるといえる。

3383A (図-4 a) の聖堂は、前述したように、アンマナーティがサン・ジョヴァンニーノ聖堂の設計を考案していた際に描いたものと考えられる。その立面の一層目の礼拝所に用いられているセルリアーナは、アンマナーティがヴィッラやパラッツォの設計にあたって好んで用いたモチーフであって、それによって生み出される空間の効果にアンマナーティは関心をもっていた。聖堂においてもそれを適用することによって、アンマナーティは主軸に直交する方向から礼拝所を眺めたときの空間の見通しを考えていたのであろう。ここではさらに長軸方向についても、聖堂の長堂の側から長軸上の奥にある集中式の空間の見通しが考えられていることが分かり、サン・ジョヴァンニーノ聖堂においてもまた、現在のヴォールト天井を平天井に置き換えてみると、アンマナーティがこうした空間の見通しを考えていたであろうことが確かめられる。

アンマナーティがこのような空間の見通しの効果に関心を持っていたことを見ても、ブルネッレスキの影響を強く受けていたことは明らかである。アンマナーティはミケランジェロの下で働き、またミケランジェロの作品を美術史上最高の段階に達したものとして評

図-4 『チッタ・イデアレ』における聖堂のデザイン

B. Ammannati, *Città ideale*, Gabinetto Disegni e Stampe degli Uffizi, Firenze

価するヴァザーリを生涯の友人としながらも、実際にフィレンツェでイエズス会にふさわしい聖堂として設計したのは、ブルネッレスキのものにより近いデザインであった。

この3383Aの図案は、多くの柱が立ち並ぶ長堂やクーポラを支える部分などを見るに、実際のサン・ジョヴァンニーノ聖堂のデザインのような装飾性をできるだけ押さえた簡素なデザインであるとは言いがたい。その図面としての完成形である3390Aについても同じことが認められ、また3382A(図-4 c)を見ても、アンマナーティがかなり装飾性の高い複雑なデザインを考えていた様子が窺われる。さらに、2944A(図-5)のように、細部に至るまで装飾が施されたサン・ジョヴァンニーノの内部立面のデザインが残されている。

アンマナーティは、彫刻についての放逸した表現を深く悔い改め、その後は建築に専心しようとした。彫刻の仕事から解放されることを強く望んで、パトロンであったメディチ家のフェルディナンド一世に手紙を書き送ったほどである²⁹⁾。しかし、『チッタ・イデアレ』の図面の数々は、機能上の要求に対応する単純な表現によるものではない。そうではないにしても、これらはイエズス会に遺贈されたアンマナーティの財産のうちの一部であるから、アンマナーティは宗教的に改悛した後にもそこに見られるような複雑な表現の図面を保管していたか、あるいはさらに新しくデザインしていたことになる。したがって、アンマナーティは聖堂のデザインとしては、引き続き装飾性を求めていると言うことができよう。

アンマナーティによる聖堂のデザインは、ブルネッレスキのそれより端正なものではない。しかしそれは、実際にアンマナーティがフィレンツェやローマにおいて学んだミケランジェロの設計と、それ以前のフィレンツェに建てられていたブルネッレスキの作品とを比べながら学んだ結果として選択し、創り出したものと考えられる。ブルネッレスキの手法をその延長線上においてさらに高めようという試みや、それに何かを付加しようとするところからは斬新な創作はできないということは、ミケランジェロ自身が認識していたことであり³⁰⁾、アンマナーティもまた、ミケランジェロが設計したメディチ家の新型居室に通って学びながら³¹⁾、この言葉を理解したと考えられる。したがって、サン・ジョヴァンニーノ聖堂の設計にあたって、アンマナーティは、平面の規則性や壁面の幾何学的分割をもって全体を整合する、ブルネッレスキがしたような厳格な構成に関心をもっていたのみでなく、ヴァザーリが述べるような「多様化」

を求めながらも、イエズス会との接触の中で、実際にこのような形態を生み出したと考えられる。

3. コッレージョ

3-1. アンマナーティによるコッレージョの計画について

イエズス会が土地の買収に手間取ったため、1583年まで聖堂の建設工事が中断されることもあったが、1584年には、聖堂はほぼ完成された。それと同時に仮設のまま使われていたコッレージョの建設が開始されることになった³²⁾。

新たなコッレージョが計画されるまでにアンマナーティが描いた図面が(図-1)であり、聖堂部分のデザインがファサードを含めて現在のものにきわめて近い形で描かれ、完成度も高いのに対し、コッレージョの部分のデザインは2つの食堂(そのうちの一方は“Refett” vecchio; 旧食堂, 他方は“Refettorio; 食堂”)が描かれるなど不完全であり、計画の途中である様子が読みとれる。聖堂のファサードの脇にある不規則な形の階段からコッレージョの入口へと導かれ回廊に至るが、この回廊は瞑想のための閉ざされた空間としてではなく、イエズス会士専用の空間である食堂や調理場と、公共性をもつべき空間である勉学場(“Scuola”; 教室)³³⁾とを隔てる空間として、両者に挟まれた位置に配されている。

また、この段階においては、既にサン・ロレンツォ広場側正面に開口部が割り付けられているが、アンマナーティがその最終的なデザインを終えたのは1590年のことである。当時イエズス会の総長であったアクアヴィーヴァ(在任期間; 1581-1615年)は、アンマナーティの計画案を検討した結果として、キリストの装飾およびバスター付きのロッジアを取り除いた、より簡潔な表現を求める返答をした手紙を、ローマからフィレンツェのトルセッリーノに宛てており³⁴⁾、そのデザインが(図-6)であると考えられている。現在のサン・ロレンツォ広場側正面と窓の割付などのプロポーシオンがきわめて類似しているため、このデザインが実現され、17世紀になってコッレージョが拡張された後にも残されたと考えられる³⁵⁾。アンマナーティはパラッツォ・ジューニなど、フィレンツェに設計したパラッツォの最上階の中央部分にロッジアを設けることがあり、このコッレージョにおいても、同じようにバスターと柱を配したロッジアのあるファサードを設計し、コッレージョの外観を都市における一つのパラッツォのように扱い設計している。

図-5 アンマナーティ; サン・ジョヴァンニーノ聖堂の内部立面のデザイン Gabinetto Disegni e Stampe degli Uffizi, n° 2944A, Firenze

図-6 アンマナーティ, サン・ジョヴァンニーノ聖堂およびコッレージョのサン・ロレンツォ広場側正面 Archivio di Stato, Disegni e Mappe, coll. I, cart. 29, n. 97, Roma

3-2. 『チッタ・イデアレ』における宗教的共同体施設

『チッタ・イデアレ』の中には、修道院計画図をはじめとする宗教的共同体施設に関する図面（n° 3393A～3398A）が残されている。それらは図面として比較的完成度が高く、さらに、各々の図面には室名が記されている。こうしたことから、アンマナーティが機能的な観点を重視して、宗教的共同体の施設の設計を行っていたと考えられる。

『チッタ・イデアレ』の中に描かれている修道院や学校といった共同体施設は、機能上コッレージオとの共通性が見られるものの、いずれもコッレージオに求められる機能の一部を満たしているにすぎない。なぜなら、コッレージオは共同生活をおくる場であると同時に外部からも訪問者を受け入れることができる場であるよう、その建築には都市に対して開かれた構造を持つという以上の機能が要求されているからである。すなわち、コッレージオはイエズス会士が聖務を行う場所であると同時に、神学校の教室としての役割を果たす場所であり、積極的に公衆に働きかけ、市民の教育にまでたずさわるという構想によって成り立っているのである。

まず、これらの各図面に描かれた施設からその空間構成を読み取り、アンマナーティの共同体施設についての考え方を理解することとする³⁶⁾。はじめに（図-7）の修道院計画図（n° 3395, “Monasterio”）においては、聖堂が2つ設けられていることが認められる。これらのうち、一方は公共に開放されているが（“C. Chiesa publica”）、他の一つは修道院の内部専用の聖堂（“I. Chiesa secreta”）にあてられており、使用者が明確に区分されている。また、2つ設けられた回廊は、双方とも公には開かれておらず、貯蔵庫や家畜小屋などを含めて、周りには修道生活に必要な諸々の部屋が配されている。また、もうひとつの修道院計画図（n° 3394A, “Convento di frati”）（図-8）に描かれているのは、共同生活を重視し、かつ世俗にも働きかける修道院であり、そこには3方向に出入口が設けられた、外部に対して開放的な回廊が一つと、そこから隔てられた形で、2つの回廊が設けられている。庭につながる奥まった場所にあるこれら2つの回廊には、共同生活の行われる場所であることを示す食堂や調理場などが配置されている。

これらの修道院は、アンマナーティが修道院の実践的な生活に着目して構想し、修道士が修道生活をおくりながら世俗にも仕えようとする際に生じる問題を解決しようと試みた例であるといえる。

また施療院計画図（n° 3397A, “Pianta per gli Innocenti maschi e femine”）（図-9）は、アーケードの描かれた図面の下半分がブルネッレスキのオスベダーレ・デッリ・インノチェンティ（Ospedale degli Innocenti）を模倣したような平面計画である。そこでは、宗教的な共同生活をおくりながら寝食を共にすること自体が目的とされていないため、建物の内部における生活には修道院ほどの閉鎖性が求められないと判断したためか、アンマナーティは外部に対して閉ざされた聖堂は設けていない。アーケードから導かれるような、都市に向かって開かれた場所に一つの聖堂が配置されているのである。それは、施設の内部のものに使用されるというよりも、むしろ公衆を受け入れるような構成であるといえる。

さらに、学校という教育を目的とした建物が扱われる（図-10）の学校計画図（n° 3398A, “Delle scuole pubbliche”）においては、3方向にアーケードが配され、外部に対してきわめて開放的なこの

図-7 B. アンマナーティ, 修道院計画図 *Città ideale*, n° 3395A

図-8 B. アンマナーティ, 修道院計画図 *Città ideale*, n° 3394A

アーケードを各室が取り囲むという単純な構成となっている。

「都市の中の都市」³⁷⁾のように見える(図-11)も、その書き込まれたタイトルから、やはり宗教的共同体施設の計画図(n° 3393A, "Calonaca")であると考えられる。アンマナーティが聖堂区の司祭に相当するような、地位にある者が集い、共同生活をする場所を考えていたと推定できる。この施設の中にアンマナーティは、井戸や調理場、洗い場から図書館にいたるまで、共同生活に必要な機能をすべて揃えようとしたばかりでなく、各々に庭付きの住居を与え、そこに独立性が高く保たれた生活を想定したのである。施設全体としては、外部に対してきわめて閉鎖的で、内部に通じる入口も、周囲を取り囲む外壁に唯一つだけしか設けられていない。

以上のことから、アンマナーティが機能を重視して共同体施設の空間構成を考え、設計したことが理解できるが、(図-7)の修道院計画図における鶏小屋から採光する院長の個室や、それに隣接する長過ぎる階段など³⁸⁾、合理的に解決されていない点も認められる。

4. 結語

アンマナーティは、フィレンツェのイエズス会の活動に即座に呼応するようなコッレージョおよび聖堂の計画を実現した。サン・ジョヴァンニーノ聖堂は、柱のない広い身廊の両脇に礼拝堂が並ぶ長堂式の単純な平面構成であるが、『チッタ・イデアレ』の中の聖堂の図面からは、アンマナーティが聖堂の設計にあたって内部の空間の見通しの効果にも関心を持っていたという事実が読みとれる。また、アンマナーティがさらにいくつもの複雑な聖堂をデザインしていたことも明らかである。

コッレージョにおいては、アンマナーティはイエズス会士が生活する空間と、勉学に必要な空間とを回廊によって分け隔てようとしていた。敷地の大きさや資金面など現実的な制約を受けない『チッタ・イデアレ』の中の修道院計画図においては、アンマナーティが、公の空間に対する回廊および聖堂の開放性や閉鎖性によって、

図-9 B. アンマナーティ、施療院計画図
Città ideale, n° 3397A

図-10 B. アンマナーティ、学校の計画図 Città ideale, n° 3398A

図-11 B. アンマナーティ、宗教的共同体施設の計画図
Città ideale, n° 3393A

修道院のあり方や、その内部空間と外部空間との関わりを考えてデザインしていた様子が窺われる。

サン・ジョヴァンニーノ聖堂およびコッレージョの設計においてもまた、アンマナーティは複雑で装飾性のある表現を考えることもあったが、イエズス会の要求を満たすよう調整を受けながら計画を進め、その結果として、機能を重視した単純な表現を生み出したと考えられる。

図

- 1) アンマナーティは1511年にフィレンツェで生まれた。ヴェネツィアのサン・ヴィーノのもとで働いた後、アンマナーティはパドヴァやヴィチエンツァに滞在し、パドヴァではマルコ・マントヴァ・ベナヴィデス (Marco Mantova-Benavides; 1489-1592 年) の庭園、ヴィチエンツァではジロラモ・グアルド (Girolamo Gualdo; 1492-1566 年) の庭園の造営にあたっている。その後ローマに赴き、ユリウス三世に仕えてヴィッラ・ジュリアのニンファエウム等を制作し、フィレンツェに戻ってからはメディチ家のパラッツォ・ピッティをはじめとして多くのパラッツォを設計した。
- 2) アンマナーティとイエズス会との関わりについては、史料をまとめたものとして、Piri, Pietro, “L'architetto Bartolomeo Ammannati e i Gesuiti”, in *Archivum Historicum Societatis Iesu* XII, Roma, 1943, pp. 5-57.
- 3) Ammannati, Bartolomeo, “Lettera agli Accademici del Disegno (1582)”, in *Trattati d'arte del Cinquecento*, a cura di Paola Barocchi, vol. II, Bari, Laterza & Figli, 1962, pp. 115-23.
- 4) 『チッタ・イデアレ』はアンマナーティが描いた数々の図面の残簡であり、現在はフィレンツェのウフィツィ美術館に所蔵されている。Bartolomeo Ammannati, *Fabbriche di sua invenzione (Città ideale)*, Firenze, Gabinetto Disegni e Stampe degli Uffizi, n° 3382A-3464A.
- 5) P. Prii, *op. cit.*, p. 6, Fossi, Mazzino, *Bartolomeo Ammannati architetto*, Napoli, Morano Editore, 1967, p. 127. Kiene, Michael, *Bartolommeo Ammannati*, Milano, Electa, 1995, p. 136.
- 6) P. Prii, *op. cit.*, p. 6.
- 7) *Ibid.*, p. 7 e segg.
- 8) *Ibid.*, pp. 14-6.
- 9) *Ibid.*, pp. 16-7.
- 10) これは、アンマナーティと生涯を通して親しい関係にあったヴァザーリと言葉である。Vasari, Giorgio, “Proemio di tutta l'opera”, in *Le vite...* (1568) a cura di Gaetano Milanesi, vol. I, Firenze, G. C. Sansoni Editore, 1981, p. 104., 他.
- 11) サン・ジョヴァンニーノ聖堂においてもアンマナーティがミケランジェロから受けた影響は認められる。例えば、フォッシが指摘するように、サン・ジョヴァンニーノ聖堂のファサードの柱の収め方は、ミケランジェロの設計したラウレンツィアーナ図書館の前室の柱の収め方に類似している点などである (Fossi, *op. cit.*, p. 133. 参照)。アンマナーティが部分的にミケランジェロのデザインを採り入れていたことは明らかである (註 31 参照)。
- 12) サン・ジョヴァンニーノ聖堂におけるサン・フランチェスコ・デッラ・ヴィーニャ聖堂との関連性については、フォッシも指摘している。Fossi, *op. cit.*, p. 134.
- 13) Giorgi, Francesco, “Promemoria per San Francesco della Vigna”, a cura di Licio Magagnoli, in AA.VV., *Trattati di Architettura* V, parte II, Milano, Edizione il Polofilo, 1985, pp. 11-7.
- 14) アンマナーティが具体的にセルリオの名を挙げたところとしては、“Bartolomeo Ammannati”, in Paciolli Luca, *Della proporzione ecc.*, Firenze, Bibl. Riccardiana, Edizione Rare, n° 120, c. 87. (Fossi, Mazzino, *La Città - Appunti per un trattato di Bartolomeo Ammannati*, Roma, Officina Edizioni, 1970, pp. 70-1.)
- 15) サンパオレージは、アンマナーティのヴェネツィア滞在について述べているが、アンマナーティがサン・フランチェスコ・デッラ・ヴィーニャの仕事に関係したかどうかについては言及していない。Sanpaulesi, Piero, “La vita vasariana del Sansovino e L'Ammannati”, in AA. VV., *Studi vasariani* (Istituto Nazionale di Studi sul Rinascimento), Firenze, G. C. Sansoni Editore, 1952, pp. 134-9.
- 16) Borghini, Raffaello, *Il Riposo* (Firenze, 1584), a cura di Mario Rosci, Milano, Edizioni Labor, 1967, pp. 590-1.
- 17) アンマナーティが最初にヴェネツィアを訪れたのは、1520年代の終わりのことである (Bettini, Sergio, “Note sui soggiorni veneti di Bartolomeo Ammannati”, *Le Arti*, X, anno III, fascicolo I, Firenze, Casa Editrice felice le Monnier, 1940. 10-1941. 9, pp. 20-7. および Kinney, Peter, *Early Sculpture of Bartolomeo Ammannati*, New York & London, Garland Publishing, 1976, pp. 8-10.). また、アンマナーティがフィレンツェにおけるミケランジェロの弟子のミーニの家からミケランジェロの素描を持ち出す騒動を起こしたのは、1529年8月から1531年11月の間のことである。したがって、アンマナーティはおそらく1531年の終わりには、ヴェネツィアからフィレンツェに戻っていたことになる (G. Vasari, *op. cit.*, VII, “Micheagnolo Buonarroti”, p. 227, および Milanesi, Gaetano, “Commentario alla vita di Michelagnolo Buonarroti”, in G. Vasari, *ibid.*, p. 335.). アンマナーティはその後ウルビーノで働いてから、再びフィレンツェに戻った。フィレンツェでマリオ・ナリの墓廟を制作したことからは問題が生じ、アンマナーティはフィレンツェに留まっているのに嫌気がさして、ヴェネツィアに発ったのである (Baldinucci, Filippo, *Notizie de' professori del disegno da Cimabue in qua*, Firenze, 1688, vol. 2, p. 3.). マリオ・ナリの墓廟は1542年8月末には完成していたと考えられるから (Kinney, Peter, *op. cit.*, pp. 83-5.), アンマナーティがヴェネツィアを訪れたのは、その後のことである。
- 18) Ackerman, James S., “The Gesù in the Light of Contemporary Church Design”, in *Baroque Art - The Jesuit Contribution* (edited by Rudolf Wittkower and Irma B. Jaffe), New York, Fordham Univ. Press, 1972, pp. 15-28.
- 19) *Ibid.*, p. 19.
- 20) 後述するように、『チッタ・イデアレ』の中には、ブルネッレスキのデザインを採り入れて描かれた図面 (n° 3397A) がある (また、註 30 を参照)。
- 21) J. S. Ackerman, *op. cit.*, p. 22 foll. なおアッカーマンは、“box style” がさらに発展した平面形として、ローマのイル・ジェズ聖堂を取り上げ、後の多くの聖堂はこれを模してつくられたと述べている。
- 22) M. Fossi, *op. cit.* (1970), pp. 44-7.
- 23) Pecchiai, Pio, *Il Gesù di Roma*, Roma, 1952, p. 55.
- 24) J. S. Ackerman, *op. cit.*, pp. 19-20.
- 25) F. Giorgi, “Promemoria...”, *op. cit.*, pp. 13-4.
- 26) M. Fossi, *op. cit.* (1967), p. 131e segg.
- 27) P. Pirri, *op. cit.*, pp. 51-2 (f. 348).
- 28) M. Fossi, *op. cit.* (1967), p. 155 e segg.
- 29) Gaye, Giovanni, *Carteggio inedito d'artisti del secolo XIV, XV, XVI* (Tomo III 1840), Torino, Bottega d'Erasmus, 1968, p. 578, n° CCCCLXL.
- 30) G. Vasari, *op. cit.*, VII, “Michelagnolo Buonarroti”, p. 192.
- 31) G. Vasari, *ibid.*, VI, “Battista Franco”, p. 574. ここには、アンマナーティが多くの仲間と連れだつてミケランジェロの新聖具室の研究をするうちに、パッティスタ・フランコと知り合いになる様子が描かれている。特に、アンマナーティの作品の中で、ミケランジェロのメディチ家新聖具室の影響が認められる例としては、パドヴァ滞在中に制作したエレミターニ聖堂 (San Eremitani) におけるマルコ・マントヴァ・ベナヴィデスの墓廟があげられる (三角形と円弧形のティンパヌムが交互に配置されたニッチや、中央のニッチに置かれたマントヴァ・ベナヴィデスの彫像などから、アンマナーティがミケランジェロから受けた影響を窺うことができる)。
- 32) P. Pirri, *op. cit.*, p. 20, p. 28 e segg.
- 33) 実際にフィレンツェのイエズス会が世俗のために教室を使用したのは、1616年のことである。M. Kiene, *op. cit.*, pp. 136, p. 145 (note 41).
- 34) P. Pirri, *op. cit.*, p. 51, N. 13.
- 35) M. Kiene, *op. cit.*, pp. 142-44.
- 36) 図面の名称については、アンマナーティが各々の図面に書き添えたものを本文において “ ” の中に記してある。また、図面の中の文字は判読できないほど不明瞭になってしまうため、本稿においては各室・各部の名称については、筆者が同じものを記入した。
- 37) M. Fossi, *op. cit.* (1967), p. 18.
- 38) M. Fossi, *op. cit.* (1970), pp. 70-1.

(1997年5月10日原稿受理, 1997年8月20日採用決定)